

私たちは情報が溢れる社会に生きている。現代人の一日の情報量は江戸時代の人々の一年分の情報量だという。しかし、その情報の真偽はなかなか掴めない。前田朗氏が『ジャーナリストたち 闘う言論の再生を目指して』を著している。「ジャーナリズムの変容はとどまるところを知らない」と言い、紙媒体の新聞・出版から放送媒体のラジオ・テレビに変わり、今は、オンラインに変わってきていると指摘している。若者たちは、新聞も読まず、テレビも見ず、オンライン・ジャーナリズムに依存している状態にある。ネット空間をフェイクやヘイトや陰謀論が渦巻き、被害者が続出している。社会で形成したルールや報道倫理綱領などを無視し、自由勝手に飛び交っているので、「事実は何か」を判断することが困難であると言う。私はスマホやユーチューブでのニュースも時々見るが、信頼できない情報が多いのではないかと、また、見方が偏ってしまうのではないかと考えている。情報をどのように受け止めるかが、深刻な問題となっている時代に生きている。

前田氏は「現代日本のマスメディアの多くは、権力の提灯持ちとなり忖度・翼賛し、時の政権の広報機関と化している」「ジャーナリズムはほとんど絶滅危惧状態だ」と、彼らしい手厳しい批判を展開している。第一に男性によるジャーナリズムから脱したジェンダーの視点、第二に、マジョリティ中心主義の弊害を乗り越えたマイノリティの視点を重視している。これらの視点は、マイノリティ性へと極小化せず、国際性や他民族性を孕むことによって、ジャーナリズム論への刺激が得られると言う。前田氏は、9人のジャーナリストに、生い立ち、研鑽、現在の闘いと未来への展望などをインタビューして、次代のジャーナリズムあり方を提示している。彼女・彼たちの身を粉にした働きに敬服し、闘いの凄まじさに敬服する。その中から、3人の興味深い話を紹介し、私の感想を加えたい。

新垣毅氏は、沖縄県那覇市生まれで、紆余曲折の後に、「琉球新報社」に入社し、沖縄問題を追及している。新垣氏は、「沖縄問題は、端的に言えば、日本の植民地主義の問題なのです。その植民地主義に対抗する概念が自己決定権です」と語っている。的を射た発言ではないか。本土で培ってきた民主主義は沖縄では通用せず、植民地化したままである。そこで、沖縄県民は自己決定権を獲得しようと闘っている。それに、本土はどう応えるかと問うている。また、台湾問題に絡んだ米中対立の激化は、沖縄の死活問題で、「人間の安全保障」という考え方を通して、発信していきたいと語っている。

安田浩一氏は、差別やヘイトスピーチや外国人研修生問題などを追求し、幾つもノンフィクション賞を受賞している。安田氏は転校が多く、いじめられた。いじめから逃れるために、いじめられていた女子生徒をいじめた。それで、自分へのいじめは減った。卒業の時、いじめた女子生徒から「安田君は一番手加減してくれた。本当にうれしかった。ありがとう」と書かれた手紙を受け取った。「ありがとう」の言葉に、一人でわんわん泣いたと言う。私も涙した。安田氏なら、差別の問題が良く見えるであろうと思った。

乗松聡子氏はピース・フィロソフィーセンターの代表者で、戦争問題を広く手掛けている。ロシアのウクライナ侵攻について「日本を含む西側のあまりに一方的な報道、あまりの翼賛ぶりに驚いています」と語っている。米国の帝国主義の論理、世界覇権を肯定するファシズムの中で、米国の論理に異議を唱えるジャーナリストが次々に排除されている。西側支持一辺倒の報道では解決を生み出さないと。私は、ロシアの残虐さに怒りを覚えるが、米国のアフガン・イラク戦争における傲慢さは批判されるべきで、米国に無批判に追従する日本政府の政策に深い危惧を感じている。